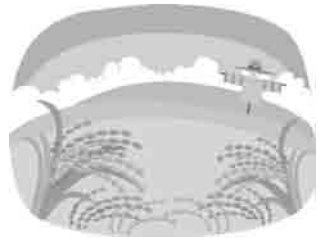


しまなみ農業だより

冷夏の襲来？



本稿を執筆中の6月初旬は、ようやく日中暖かくなり初夏の兆しが見えてきたものの、まだまだ朝晩涼しく、流れてくる風にほのかに遅れたかんきつの花香が混じります。この号をお読みの皆さんには例年どおりの暑い夏が訪れているでしょうか。

2010年春季の気象の概況

今年は2月暖かかったものの3月から5月にかけて気候の変動が激しく、10日ごとに暖かい／肌寒いを繰り返しました。かんきつの開花は最近数年の水準より10～14日程度遅れ、10年前に戻りました。6月上旬時点で梅雨前線はるか沖縄より南へと下がり、上空には時折大陸からの寒気が入り込むような気象状況です。今年に入梅が大幅に遅れ、ひよっとすると1993年（平成5年）型の冷夏が来るのではないかと懸念しています。

記録的な1993年の冷夏

1993年は1954年に次ぐ戦後2番目に平均気温の低い夏で、8月に入っても梅雨前線が日本上空に停滞し、南西諸島を除く地域で梅雨明けが特定されなかった記録的な冷夏でした。全国的にコメが不作になり「平成の米騒動」とも呼ばれる事態に発展し、タイ

等からコメの緊急輸入が行われたのを思い出します。この年の冷夏の最大の原因とされるのが、1991年6月におこったフィリピン・ルソン島のピナトゥボ山の噴火です。このときの火山性噴出物は成層圏中に3年間も漂い、地表に達する太陽光を最大で5%減少させ、北半球の平均気温が0.5から0.6℃下がったと言われています。このときは同時にエルニーニョも発生しており、日本付近を冷夏にする条件が重なったといえます。

ふり返って2010年はご存知のように、3月から5月にかけてアイスランドの「エイヤフヤトラヨークトル」で一連の噴火により、火山灰等が北米からシベリア上空を覆い、多くの航空機の離発着に影響を与えたのは記憶に新しいところです。

冷夏のかんきつの状況と対策

かんきつについてみると、1993年はその前の91、92年が2年続きの表年となった反動で裏年となっており、着果量が少ない上に長雨と日照不足で必ずしも良い品質とはいえませんでした。全国的な品薄感により相場は堅調で、単価はまずまずでした。

2010年はどうかというと、やはり昨年着果過多であった影響で全国的な不作が予想されており、一説には需要予想量の8割程度しか供給できないのではないかと、といわれています。こうした年こそチャンスであり、予想どおりの冷夏なら、
①早めにマルチ等を敷き、糖度の上昇に努める
②ジマンダイセン等の散布や枯れ枝の除去により、黒点病対策を徹底する
といった品質向上対策を施し、残った果実を着実に高値で売れるよう努力すべきです。幸いな

ことに、昨年より続いていたエルニーニョは5月末で収束の方向にあり、一旦梅雨が明けてしまえば遅く暑い夏（秋？）が予想され、秋季の好天は品質を向上させる方向に働きます。露地栽培にあつてはどんなに技術が進歩しようとお天気には勝てません。われわれができることは、どんな天気が来ようが良果が収穫できるように結果母枝を用意すること。そのためには裏年のあとは必ず徹底した剪定を行わなければなりません。私は今年の冷夏予想が外れることを祈っています。

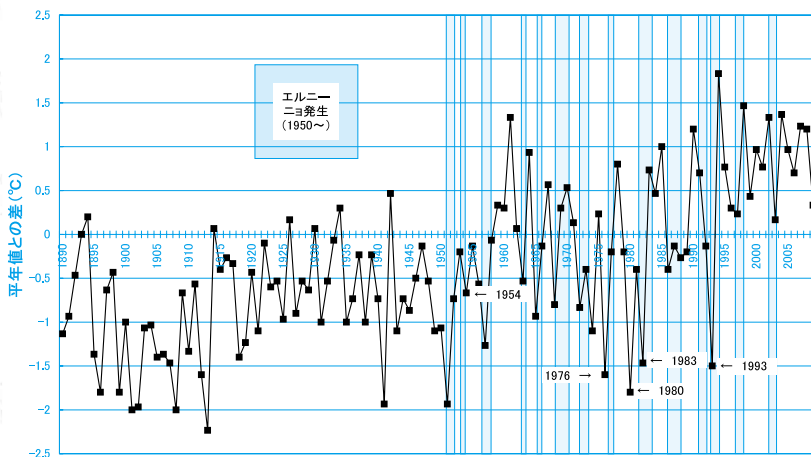


図1 平年値との差 (7月～9月の気温 松山气象台)